

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 26 年 7 月 18 日	
所属部局・職	野生動物研究センター・修士課程学生
氏名	楊木 萌

<b>1. 派遣国・場所</b> (○○国、○○地域)
日本モンキーセンター, 犬山, 愛知県
<b>2. 研究課題名</b> (○○の調査、および○○での実験)
PWS 動物園・博物館実習
<b>3. 派遣期間</b> (本邦出発から帰国まで)
平成 29 年 7 月 8 日 ~ 平成 29 年 7 月 10 日 (3 日間)
<b>4. 主な受入機関及び受入研究者</b> (○○大学○○研究所、○○博士/○○動物園、キュレーター、○○氏)
公益財団法人日本モンキーセンター 附属動物園園長 伊谷原一先生
<b>5. 所期の目的の遂行状況及び成果</b> (研究内容、調査等実施の状況とその成果: 長さ自由)
写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
今回は PWS の動物園・博物館実習へ参加するため、愛知県犬山市の日本モンキーセンター (JMC) を訪れた。
<b>【日程】</b>
7 月 8 日: 京都駅→名古屋→犬山 園長によるレクチャー、園内見学, 標本実習
7 月 9 日: 教育・科学コミュニケーション実習, 飼育実習
7 月 10 日: 博物館学概論, エンリッチメント実習, JMC 研究活動紹介, 獣医実習/ 犬山→名古屋→京都
<b>1 日目</b>
京都から犬山へと移動し、日本モンキーセンター事務所で今回の実習生が集めた。まず初めに伊谷先生から JMC の紹介、今後の課題等レクチャーを受けた。動物の福祉を重視しながら、来園客も楽しめるような動物園を運営していくためには、様々なアイデアを取り入れて改善していく必要があると学んだ。 その後、モンキーセンター内を見学し、現在の飼育環境を把握することに努めた。その後動物園での標本作成の重要性を講義で学び、実際に JMC で保存されている霊長類の骨格標本を観察した。同じ種であっても骨格には個体差があり、家系図や生存時の状態の記録が残されていることを有効的に利用し、世代や生育状況による表現型の変化を考察することができる。だからこそ多数の標本を保存することに意味があると知った。標本の観察の後は、ペアに分かれ実際に学芸員の方が行っている骨格標本の整理、番号付けを行った (図 1)。
<b>2 日目</b>
今日は午前中に科学リテラシーについての講義を受けた。科学者と市民の橋渡しをするサイエンスコミュニケーターという職業について知り、相互の認識の違いを理解し、相手に伝わるような情報発信、意見交換に取り組むことの重要性を知った。科学者が積み上げた知識、確立した技術を現実世界で活用するためには、科学者以外の市民の意見が不可欠である。これは動物園においても言えることで、まず来場客の反応、意見を知らないことには改善していくことはできない。そこで、昼休憩までの時間で JMC の来場客の調査を行った。再びペアに分かれ、動物展示に訪れた来場客の構成、展示に対する反応の聞き取りを行った。当初予想したよりも来場客が一つの展示にかかる時間は短く、ガイドなどがいてもあまり興味を示していない家族連れもいた。人により来園する動機は様々であり、園側も多様な来場客を受け入れる対応が必要だと感じた。 午後は、飼育実習を行った。私が担当したのはシシザル、ヤクシマニホンザル、テナガザルにリスザル等が飼育されている JMC 北部である。まずシシザルの個体観察を行い、雌雄の特徴、年齢の把握に取り組んだ。現在メスザルが 30 頭、オスザルが 50 頭、総計約 80 頭が JMC で飼育されている。すべての個体を識別するためには相当の努力と時間が必要であり、短時間では難しかった。また繁殖調整も重要であり、現在インプラントを与えることで繁殖抑制に取り組んでいるそうである。次にヤクシマニホンザルの観察を行った。ヤクシマザルの個体数はさらに多く、現在 160 頭が飼育されている。飼育員の一人の方は全個体の識別が可能であるとのことだった。また彼らのうち複数頭に、石をたたき合わせて音を出す、木の棒を使いフェンスの外の固形資料や葉を近寄せて食べる (図 2)、などの独特な行動が見られた。石たたき行動は主に給餌後に多く行われ、多い時は 40 頭ほどが同時に行っているようだった。他個体との協調性があるのかなど疑問がいくつか浮かんだが、同時に行う個体が多いことで観察、記録が容易ではないとのこと、本行動については明らかになっていないことが多いようだ。現在、棒の使用行動は観察・記録が行われており、我々が伺ったときも有志のボランティアの協力によって、本行動を平成 29 年個体の識別等が行われていた。その後我々は

## 「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

スザルの森に移動し、リスザルの誕生日会という名称で行われていたイベントに参加した。このような活動は来場客の方にリスザルに与える食べ物を用意してもらうことで、リスザルの食性、生態の理解を深め、また彼らのエンリッチメントを向上させるために定期的に行われている。今回は7月生まれのリスザルが多いことから誕生ケーキの作成が行われた。通常与えられているサツマイモ、リンゴ、バナナの他に普段は与えられていないスイカやサクランボ、ヤマモモを用意し、参加された来園者の方と共にケーキを作成した(図3)。飼育員の方はケーキを与える際に、どの食物が最初に食べられ、どの食物が残されるか観察するよう参加者の方に促しており、このような問いかけにより参加者の方々の注目も高まり、より深い理解につながっていたように感じた。参加者のほとんどは親子での参加であり、子どもたちは間近でリスザルの捕食行動を観察し、食物の選択の仕方などについて自由に発言していた(図4)。

### 3日目

この日はエンリッチメント実習に取り組んだ。まずはビジターセンターにて講義を受け、エンリッチメントにはどのようなものがあるか、JMCではどのようなエンリッチメントが行われているのか学んだ。近年では行動の種類を増やすだけでなく、その種本来の行動を発現する機会を提供する、環境エンリッチメントという考え方が広まってきているようだ。これを実現するためにはそれぞれの野生下での生態をしっかりと把握する必要があり、飼育員の方々が担当種の生息地に赴き観察を行うことは重要であると思う。また現地で観察を行う研究者との連携も有効な手段である。講義を聞いた後は、実際に採食エンリッチメントを目的とした装置を作成し、テナガザルの野外展示に設置した(図5)。彼らは野生下では樹上で採食を行い、地上で採食を行うことは少ない。野外展示でもなるべくそのような行動を引き出せるよう、麻袋やパイプ等の材料から色々な種類のフィーダー(給餌装置)を作成し縄でぶら下げ、できるだけ高い位置に設置した(図6)。その結果、木の枝につかまりながら片腕をフィーダーに伸ばし、採食を行う行動を観察することができた(図7)。また通常の給餌の時よりも採食時間は長くなった。あいにくの急な降雨のもとでの活動であったが、エンリッチメントは金銭だけでなく、知識と工夫でも実践することができることを身をもって実感することができた。

午後は博物館学概論と獣医実習、さらにJMCで行われてきた研究活動の講義を受けた。医療室では実際にワオキツネザルに麻酔をかけ、治療を施すところを見学させて頂いた(図8)。高性能な麻酔装置が設置されており、多種多様な野生動物たちを相手に治療するために様々な麻酔薬や治療薬が用意されていた。このようなエンリッチメントや医療設備が全ての動物園で充実し、ストレスや病気で死亡する動物を少しでも減らしていく必要があると感じた。



図1 骨格標本の観察



図2 棒使い行動をするヤクシマニホンザル



図3 来園者参加型体験



図4 リスザルの採食行動の観察

# 「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



図 5 作成したフィーダー



図 6 フィーダーの設置



図 7 テナガザルの採食



図 8 ワオキツネザルの麻酔・治療

## 6. その他 (特記事項など)

お世話になりました JMC 園長の伊谷原一さま, キュレーターの大淵 希郷さま, 及び日本モンキーセンターのみなさまに心より感謝致します。本実習は PWS のご協力により参加することが出来ました。ご支援いただいた PWS に感謝申し上げます。